



2012年 7月 22日 (日)

京都府立府民ホール アルティ

KYOTO FINE ARTS BRASS

京都ファインアーツ・ブラス 第16回演奏会



KYOTO FINE ARTS BRASS
16TH CONCERT



本日は私たち京都ファインアーツ・ブラス第16回演奏会にお越しくださいませ、誠にありがとうございます。今回は、2004年以来8年ぶりに京都での開催となり、ここアルティにて再び皆様とアンサンブルの世界を共有できますことを大変嬉しく思います。

私たちは、団体の結成時よりずっと「アンサンブル」という合奏スタイルをとっています。個々の奏者はお互いの演奏を注意深く聴きあい、また時に強い主張をもって表現することで合奏がなりたちます。こうした演奏中の「やりとり」の中で、音を通じて心がひとつになったり、ハーモニーに生命力が加わったりする“瞬間”が生まれます。この瞬間の共有こそがアンサンブルの醍醐味であり、私達の心をとらえて離しません。また、演奏をする私たちと聴いてくださる皆さまの距離が近く、単に奏者だけで音楽を奏でるのではなく、皆さまの呼吸を感じて音楽を共有できることが、何よりの喜びです。

さて、今月27日からはロンドンオリンピックが開催されます。また、エリザベス女王即位60年、ビートルズ結成50年と、まさに今年はロンドン・イヤーです。私たちも今回のプログラムは、イギリス・ロンドンにちなんだ曲を中心に集めました。イギリスといってもルネサンス時代の宮廷舞曲から現代に至るまで様々ありますが、どれもが気品ある中にもウィットに富んだ素敵な作品ばかりです。本日の演奏会では、京都ファインアーツ・ブラス (KFAB) ならではのサウンドやステージをお楽しみいただくなかで、アンサンブルの音楽の魅力を皆さまにも楽しく感じ取っていただければ嬉しく思います。

それでは、素敵なロンドンの旅をあなたと共に・・・

京都ファインアーツ・ブラス



オーウェン・エドワーズ
入場のための音楽

アンソニー・ホルボーン
エリザベス朝の舞踏音楽集より

ルートヴィヒ・マウラー
12の小品より

スティーヴン・ドッジソン
金管7重奏の為の組曲

・・・ 休憩 ・・・

エンリケ・クレスポ
2本のフリューゲルホルンのためのバラード

ジョゼフ・ホロヴィッツ
ミュージックホール組曲

エンリケ・クレスポ
ロマンスと変奏曲

ゴードン・ラングフォード
ロンドンの小景



1940～



オーウェン・エドワーズ OWAIN EDWARDS

入場のための音楽 PROCESSIONAL MUSIC FOR BRASS

Tp1 北村(雅) Tp2 伊豆田(恭) Tp3 加悦 Tp4 浅野 Hr 井田
Tb1 田中 Tb2 藤岡 Tb3 藤本 Tb4 小野 Tuba 峯松

オープニングを飾る“Processional Music for Brass”は、いつだったかあるメンバーがヨーロッパ旅行中に楽譜屋で見つけたという偶然の出会いから、本日皆様にお届けする運びとなりました。

エドワーズは、1940年ウェールズに生まれ、1965年ノルウェーの女性と結婚し、息子1人、娘2人に恵まれました。音楽歴史学者としてイギリスの大学で何年か教えた後、1974年にノルウェーに移り、2008年までノルウェー音楽アカデミーの教授として在籍していました。1980年代には、いくつかのマーチングバンドを指揮し、また一方で、オルガン奏者として1981年から25年にも渡り KROER CHURCH (教会) で演奏していました。今現在は、作曲に重点をおいて活動をしており、この秋にも新作の金管5重奏などが出版される予定です。

この曲には、編成の違う2つのバージョンが存在します。一つは、オルガンとトランペット4本の編成(1991年版)のもので、この曲が作られたきっかけは、愛娘の結婚でした。作曲家でありオルガン奏者でもある彼が、教会での結婚式のために“ブライダルマーチ”として作ったもので、結婚式の開始を知らせるトランペットのファンファーレで始まり、教会へお祝いに来られたお客様を暖かく迎えるオルガンのソロ、そして結婚する二人の幸せな未来へ祈りを込めた合奏へと続きます。祝福を受け結婚した娘夫婦は今も幸せな結婚生活を送っているそうです。

もう一つは、金管10重奏の編成(1995年版)です。先に作ったオルガンとトランペットの響きによるブライダルマーチを、他の厳粛な場面でも演奏出来るように、金管楽器だけの編成で編曲したそうです。本日は、この金管10重奏のバージョンをお届けします。

今回の演奏会でこの曲をとりあげるにあたり、作品や作曲者についての文献などを探しましたが、それほど多くの情報を見つけることはできませんでした。そこで様々なルートをとった結果、幸運にもエドワーズさん本人と直接コンタクトをとることができました。突然のことにも関わらず、この曲が作られた背景やエピソードなど、こちらからの質問、疑問に快く答えていただきました。曲についての知識が深まったことはもちろんですが、何よりその丁寧で親身なお返事から、紳士らしいお人柄を感じました。この貴重な出会いを大切に、心をこめた演奏をお届けしたいと思います。

エドワーズさん、本当にありがとう!!

1545～1602



アンソニー・ホルボーン ANTHONY HOLBORNE

エリザベス朝の舞踏音楽集より

FROM ELIZABETHAN DANCE MUSIC

Tp1 貝發 Tp2 能勢 Hr 古市 Tb 北岡 Tuba 中西

「エリザベス朝」というのは、16世紀の後半、1558～1603年の長きに渡ってイギリスを統治したエリザベスI世の時代のことである。「女王陛下を戴くと国が栄える」という言葉が生まれたように、この時代はまさにイギリスの黄金時代と呼ばれた。人々は生活を楽しみ、文芸も栄え、音楽の面でも多くの素晴らしい音楽家を生み出した。

エリザベスI世自身もヴァージナル(チェンバロの一種)を奏で、歌を歌い、そして何より踊りを愛好した。この時代に活躍した作曲家の一人、ホルボーンの生涯について分かっていることは、ほんのわずかのようである。

1562年にケンブリッジ大学に入学、1565年よりインナーテンプル法学院(ロンドン中心部にある法曹院)に籍を置き、1584年に結婚。1602年に風邪をこじらせて他界。生前は声楽曲や詩の創作に加えて、音楽理論書の執筆活動も手掛け、さらにエリザベスI世の宮廷音楽家として並び立つ者のない存在であった。(・・・とあるが、王宮の記録にはホルボーンの名前は一度も出てこず、彼が正式な宮廷音楽家であったかは謎のままである。)

ホルボーンは、1599年に65曲からなる「Pavans, Galliards, Almains, and other short Aeirs both grave, and light, in five parts, for Viols, Violins or other Musically Winded Instruments (ヴィオール・ヴァイオリンもしくは他の管楽器のための厳粛あるいは軽快な5声のパヴァン・ガリアード・アルメーンならびにその他の短いエア集)」を出版した。この舞踏音楽集は16世紀に出版されたものとしては最大規模を誇り、パヴァン(パヴァーヌ)とガリアード(ガリアルド)という緩・急の舞踏曲が組になったものが大半を占め、残りがアルメーン(アルマンド)になっている。

本日の演奏するのは、この舞踏音楽集よりガリアード～パヴァン～ガリアードの3曲を抜粋し、ブラスアンサンブル向けに編曲されたものです。

I. Muy Linda

訳すると「very pretty (とてもかわいい)」という意味のスペイン語らしい。3拍子の中に2拍子が入り混じる、特徴的なガリアードとなっている。

II. Pavan

パヴァンとは、16～17世紀にヨーロッパの宮廷で流行した2ステップ+2ステップ+4ステップの、ゆったりと優雅なすり足の行列舞曲である。

III. Galliard

ガリアードには「活発な」という意味があり、16～17世紀にヨーロッパで流行した快活で速い3拍子の跳ね踊りである。

ホルボーンの舞踏音楽集には他にも「The Image of melancholy (憂鬱の映像)」や「The Night Watch (夜警)」のような英語や、「Heres paternus (父の後継者)」や「Patiencia (忍耐)」のようなラテン語といった、しばしば意味深長な副題を伴うものがある。インテリしさが感じられる中に時々見え隠れる遊び心。ホルボーンという人物への興味が沸々と湧いてくる作品である。

舞踏好きとして有名であったエリザベスI世は、特にガリアードを毎朝6曲か7曲も踊ったらしい。ホルボーンはそんなエリザベスI世のために多くの曲を作り、宮廷を音楽で満たしていた。

遠い昔、イギリスの黄金時代に奏でられた舞踏曲を現代の私たちが演奏できる喜びを心で感じ、当時の風景を思い浮かべながら演奏したいと思う。



Ludwig Maurer: 彼の名は「マウラー」もしくは「マウレル」と日本では呼ばれています。ブラスアンサンブルの名曲の中でも、彼の作品「12の小品」は広く知られており、よく演奏されています。多くの場合12曲から3曲または4曲を選んで「3つの(または4つの)小品」として演奏されます。そうして取り上げられた数曲でも人々の心を魅了してしまうほど、この作品は大変魅力的なものです。しかし、その知名度に対し、彼自身についてはあまり知られていません。そこで彼の人生を少しひもといてみましょう。

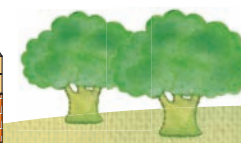
ルートヴィヒ・マウラーは、1789年にドイツのポツダムで生まれ、1878年ロシアのサンクトペテルブルクで亡くなりました。ヴァイオリニストとして13歳の時にベルリンでデビューするなど元々はドイツで音楽活動を行っていましたが、ナポレオンのドイツ占領を機に活動の拠点をロシア(現在のロシア、ラトビア共和国)に移しました。その後、彼は名ヴァイオリニストとして、パリ、ハノーファーなどで各地で演奏活動を行っただけでなく、指揮者や作曲家としても偉大な業績を残しています。晩年にはサンクトペテルブルクに移り住み、オーケストラの音楽監督など、人生の最後まで旺盛な音楽活動を行いました。

作曲家としてのマウラーは、多くの楽曲を残しています。その作品は「交響曲op.67」、当時有名であった「4つのヴァイオリンのための協奏交響曲op.55」、10曲のヴァイオリン協奏曲、その他室内楽曲や練習曲などです。彼の作品では、ヴァイオリニストにスピカートや重音奏法など極度の名人芸を求めており、当時の最高峰に数えられました。

そんな彼がブラスアンサンブルのための「12の小品」をなぜ、いつ頃作曲したのかはわかりませんが、ロシアのあるアマチュア音楽家のために書いたと考えられています。また、彼の死後3年を経た1881年になって初めて出版されていますが、彼の息子と同じオーケストラにいたヴィルヘルム・ラムゼーがブラスアンサンブルのための作品を書いていたことに関係があるのではないかとされています。

近代に進むにつれ、オーケストラの中に金管楽器が積極的に取り入れられていきました。しかしそれとは対称的に、ブラスアンサンブルのためのオリジナル曲は、ほとんど作られなくなっていたことから、この作品は、19世紀に作曲された貴重な作品の1つです。それまでの多くの金管楽器のための曲と同じように、歯切れの良さやそれを強調するリズムを生かした曲、また「リート(歌)」のようなメロディックな曲などで構成されています。

- I Maestoso alla Marcia 足並み揃えて荘厳な行進をします。
- IV "Scherzo" Vivace 速い3拍子の曲。2本のトランペットが、ユーモア交じりに会話をしているよう。
- II Andante con moto 音楽がロマンチックに動いていきます。
- III Allegro grazioso Allegroで速いテンポの中にも、優雅な上品さを感じます。



この作品がきっかけでブラスアンサンブルの世界に一步を踏み出したという金管奏者の方、きっといらっしゃいますよね。

本日演奏する私たちも、少なからず同じ想いを抱いています。四半世紀以上の時を経て実現に至った先輩方、感無量ですね! 当時のエピソードについてインタビューしてみたところ、FMラジオから流れてきた音楽は相当な衝撃だったとのことでした。

初演は1957年、ブラスアンサンブル愛好家なら誰もが影響を受けたであろう、フィリップ・ジョーンズ・ブラス・アンサンブル(PJBE)によるもので、当時33歳のドッジソン氏が、それまでも親しく付き合いのあったPJBE創設者フィリップ・ジョーンズ氏のために書いた作品です。ジョーンズ氏はなんと29歳。

この曲の編成は、トランペット3本、トロンボーン3本、チューバといういわゆるオーケストラの金管後列とも言えますが、当時、ヒンデミットやストラヴィンスキーの作品に金管を含む管楽アンサンブルの作品はあったものの木管楽器が主体であることが多く、金管後列のみの編成で完成された音楽を演奏するという斬新な発想自体、相当なインパクトを与えたと思えます。

もしも、ブラスアンサンブルの活動絶頂期に新進気鋭の若手作曲家に曲を・・・しかもとびきり前衛的な曲を書いてもらったとしたら、私は今どうなっていたら・・・?

ドッジソンは1924年にロンドンで生まれ、王立音楽大学(RCM)で学び、その後も同大学にて教鞭を執りました。その後はBBC(英国放送協会)と契約し、音楽評論家兼キャスターとして多くの有名なラジオドラマ作品の付随音楽の作曲なども手掛けています。作品のほとんどは特定の演奏家のために書かれたもので、引退後の現在もなお、多くの親しい音楽家とともに活動しており、作曲に対する情熱も衰えることはありません。

作品はほぼすべてのジャンルに及び、オペラやカンタータなどの声楽作品、管楽器のための協奏曲、ギター、ハーブシコードのための曲、弦楽四重奏など多岐に渡っています。また、「金管7重奏の為の組曲」とほぼ同時期に作曲された作品に「ギターと室内楽のための協奏曲」がありますが、こちらは当時ソロデビューから1年、若き18歳のギター奏者ジョン・ウィリアムズの独奏により初演となったことも印象的なエピソードです。

私たちの演奏会でこの作品を演奏するのは実は2回目になります。前回演奏した際には、ドッジソン氏とファックスで作品についてのエピソードなどを直接交換するという、大変幸せなご縁をいただき、この曲の楽章ごとの特徴や、作曲に至るきっかけについて深く理解することができました。

4楽章から成るこの曲は、前述のとおり、作曲家の様々なジャンルにおけるエッセンスを散りばめた、大変意欲的で魅力的、今風に言うと「攻めた」作品であると、私は思っています。



2本のフリューゲルホルンのためのバラード
BALLADE FOR TWO WINGS

Solo Flh1 貝發 Solo Flh2 北村(美)
Hr1 古市 Hr2 井田 Tb1 藤岡 Tb2 北岡 Tb3 小野 Tuba 中西 Drs 堀内

1 楽章 Andante

力強い、そしてどこか不安定でもある上昇音形による主題がトランペットにより奏され、他の楽器にも受け継がれていきます。スコアをじっくりと見つめていると、何かに似ていることに気付かされます。ハーブシコードの楽譜を7本の金管楽器で奏するといったところでしょうか。そして、どこかで聴いたことのあるような…。スカララッティに似ている、と思いませんか？ そう言えば、スカララッティのチェンバロ曲の金管5重奏曲がありますが、ドッジソン氏のアレンジでしたね。金管後列で鍵盤楽器の世界を表現しようとした、まさに前衛的な楽章と言えます。

2 楽章 Allegretto con moto

作曲者によれば、2楽章と4楽章はディヴェルティメント(喜遊曲)とのこと。2楽章を聴いて、私はプロコフィエフの交響曲第5番の2楽章を思い浮かべましたが、テンポ設定をあえて駆け足が少し後ろに引っ張られるような速度にしているところに強いこだわりを感じます。この楽章において特筆すべきことは、チューバをソリストとして扱っていることであり、複雑で技巧的な旋律を、全編にわたりチューバが魅力的に歌っていきます。この発想も、当時としてはかなり斬新であったことでしょう。金管後列の中で、しかも最低音域のチューバがソリスト…なんて発想は、オーケストラでは考えられませんから。初演当時のPJBEのチューバ奏者が、「指揮者がいないと分からない!」と(もちろんジョークでしょうが)叫んだというエピソードもあるほどです。なんとも喜びと興奮が伝わるスマートなコメントですよ。

3 楽章 Lento

“majestic”なトーンで演奏される、ゆったりとした典礼風の楽章です。イギリスの格式伝統を感じさせる、荘重で誇り高い旋律。スコアを見ると、やはりハーブシコードにも置き換えられるような旋律にも見受けられます。また、ところどころ7本で奏されるハーモニーは不協和音というよりは、よく見ると音階になっていることから、ギター分散和音やグリッサンドを潜在的に意識させようと、あえて和音にしてみたのかもしれませんが。そう考えると、ロドリゴのアランフェス協奏曲のようにも聴こえてきます。作曲家の仕掛けがふんだんに盛り込まれ、その思惑はいかに?…と私の想像は尽きません。

4 楽章 Allegro con anima

予測不能なリズムの連続が特徴的なフィナーレです。フーガと言えるテーマが楽器を受け継いで奏されます。6/8拍子で進行する楽譜は、クライマックスに向かって徐々にアンバランスさを増して行き、5/8、7/8、8/8拍子が混在して現れ、完全に拍子感を失ったかのような錯覚に陥ってしまいます。複雑に絡み合ったリズムと拍子は最終的に1本の線に集約され、力強いファンファーレで曲を締めくくります。

本日は、ドッジソン氏33歳、フィリップ・ジョーンズ氏29歳の時の作品を、私たちも少しだけ(?)過去にタイムスリップして、新鮮な驚きや高なる胸の動悸を率直にお伝えできればと思います。若いつて素晴らしい…と、そんな微かな感傷も、一緒にお届けしますね。

親愛なる「あなた」へ

「あなた」に初めてお会いしたのは、ずいぶん前にお土産にもらった「in Concert」というジャーマン・ブラスのCDでした。

出会った(聴いた)瞬間からその魅力にとりつかれ
いつの日か羽ばたきたい(演奏したい)と夢見ておりました。

異国の地(ドイツ)でエンリケ・クレスポによって生みだされた「あなた」が
楽譜という形になって私の手元まで運ばれてきた時は
羽ばたける日がもうそこまで来ているということを実感し胸が一杯になりました。

それから月日は流れましたが、やっとな願かなって
大空を羽ばたけることになりました。

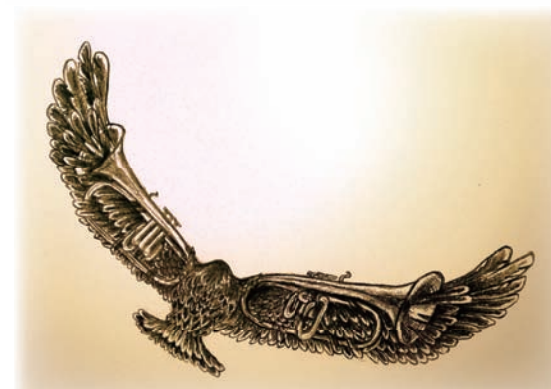
最初は2012年3月の岩手の空。

目にした光景は大震災の傷跡が色濃く残っていました。
うまく羽ばたけなくて、海で翼をぬらしてしまうようなぎりぎりのところを
飛びそうにもなりました。

でもそこの人々は皆明るくて元気で、逆に励まされながら
無事に羽ばたくことができました。

そして今日、再び羽ばたきます。

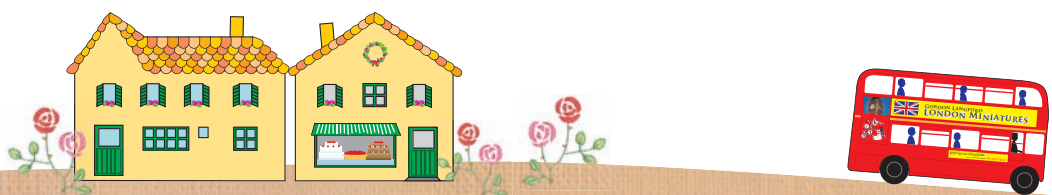
アルティという大空に「あなた」への想いをこめて… もっと高く もっと遠くへ



ドイツ語で「フリューゲル」(Flügel)には翼という意味があり、two wings(2つの翼)とFlügel(翼=フリューゲルホルン)とをかけて曲名がつけられています。

「2本のフリューゲルホルンのための」とあるように2本のトランペットではなく、2本のフリューゲルホルンをフィーチャーした曲は大変珍しく、やさしく暖かなその音色はトランペットとはまた違った魅力を醸し出しています。

それでは、つかの間ではありますが、アルティという大空を舞う姿を思い浮かべながらお聴きいただくと幸いです。



Tp1 能勢 Tp2 北村(美) Hr 井田 Tb 田中 Tuba 峯松

東京オリンピックが開催された1964年(昭和39年)のころは、金管楽器のアンサンブルのために書かれた作品がまだ少なかった時代でした。このミュージックホール組曲は、その同じ年に作曲され、今でも演奏される機会の多い「ブラスアンサンブルの古典」とも言える作品です。

曲のタイトルのミュージックホールというのは、19世紀の後半から1950年ころにイギリスで流行った演劇場です。最盛期には、ロンドン近郊だけで数百のミュージックホールがあったと伝えられていることから、当時は庶民の娯楽として、とても人気があったようです。

そうしたミュージックホールでは、お芝居や歌といった演目が次々と上演されていました。このミュージックホール組曲は、そうした演目にちなんだ5つの楽章でできています。

1. Soubrette Song (おてんば娘の歌)

ミュージックホールで演じられるお芝居は、オペラを元にしたパロディや、喜劇だったようです。タイトルの"soubrette"とは、オペラのソプラノの演じる役のことで、マドンナ役の女性の登場シーンを思わせる楽章です。

2. Trick Cyclists (曲乗り自転車)

ミュージックホールでは、自転車の曲乗りのほかにも、ナイフ投げやジャグリングといった曲芸も披露されていたようです。私たちの今日の演奏も曲乗りのように危なっかしく聞こえるかもしれませんが、もちろん、計算された演奏なんですよ。

3. Adagio Team (アダージョ チーム)

Adagio(アダージョ)とは、男女ペアのアクロバットダンスのことです。女性ダンサーを軽々と持ち上げる男性の力強さと、持ち上げられた女性の美しいポージングに、観客は息をのんで見入っていたことでしょう。

4. Soft Shoe Shuffle (ソフト・シュー・シャッフル)

コミカルで軽快なタップダンスです。私たちは演奏しながら踊ることはできませんが、心で踊りながら演奏しています。

5. Les Girls (踊り手たち)

フィナーレの楽章は賑やかなダンスです。楽章のタイトルは、「雨に唄えば」で有名なジーン・ケリー主演のミュージカル映画「魅惑のパリ」(1957年アカデミー賞衣装部門受賞)の原題と同じです。作曲者のホロヴィッツは、その映画にも影響を受けたのかもしれませんが。

Tp1 伊豆田(和) Tp2 鶴田 Tp3 浅野 Flh 北村(雅)
 Hr1 古市 Hr2 井田 Tb1 北岡 Tb2 田中 Tb3 小野 Tuba 竹内

私が小学生だったころ、初めてギターを手にして弾いてみたいと思った曲の一つが、映画「禁じられた遊び」のテーマ曲である「愛のロマンス」でした。もの悲しいメロディーと「ポロロポロロポロロ…」と分散させて弾く伴奏は、誰もが一度は耳にしたことがあると思います。哀愁をおびた美しいメロディーですが、このポロロポロロの伴奏が難しく、最初の少しのフレーズだけしか弾けなかったことを思い出します。

「禁じられた遊び」は、1952年に製作されたフランス映画です。戦争で両親を亡くした少女と牛飼いの少年が、死んだ子犬のために十字架探しをするということがきっかけでお墓作りをしていくという内容です。十字架を盗んでお墓を作る遊びはしてはいけないこと。しかし、子どもにとっては真剣な命の葬りだったのか、次第にエスカレートしていきます。大人が起こした戦争のエゴと子どもの見せる純粋な姿の対比が、心に響きます。

この映画を一躍有名にしたのが、ギターで奏でるテーマ曲。それにまつわる次のようなエピソードがあります。映画制作に費用がかかりすぎてしまい、サウンドトラックをオーケストラで演奏するお金が無くなってしまったため、ギター奏者であるナルシソ・イエペスに依頼をし、全編を通してギター1本で演奏することになったそうです。そのメインテーマとしてとりあげたのが「愛のロマンス」であり、イエペスの演奏が世界中に知れ渡りました。「愛のロマンス」は、もとはスペインに古くから伝わる民謡で、マドリッド出身のギター奏者であるビセンテ・ゴメスがギター向けに編曲したという説と、19世紀後半に活躍したスペイン生まれのギタリスト、アントニオ・ルビラが作曲した「アルペジオの練習曲」が原曲ではないかという説があるようですが定かではありません。

本日私たちが演奏する「ロマンスと変奏曲」は、ジャーマン・ブラスのメンバーであり作曲家のエンリケ・クレスポが、「愛のロマンス」のテーマをもとに変奏をつけた、ブラスアンサンブルのための作品です。

エンリケ・クレスポは、南米ウルグアイの首都モンテヴィデオに生まれ、アルゼンチンやアメリカで音楽を勉強し、地元モンテヴィデオのオーケストラの首席トロンボーン奏者、ジャズバンドのバンドリーダー、ソリスト、編曲者として活躍しました。1967年からはベルリンに留学し、その後ドイツ国内でトロンボーン奏者として活躍する一方、アンサンブル活動を始めました。1974年に立ち上げた「ドイツ金管5重奏団」は、10年後の1984年にトランペット4、ホルン2、テナー・トロンボーン2、バス・トロンボーン1、チューバ1の10人を基本編成とする「ジャーマン・ブラス」となり、様々なジャンルの音楽を演奏、録音しています。クレスポは、その優れた能力により有名な曲の新しい編曲やオリジナル曲を作曲しており、それらの作品には彼の多様な音楽性が随所にちりばめられています。

「ロマンスと変奏曲」は、まさにクレスポワールドを感じさせる作品のひとつになっています。哀愁をおびた美しいメロディーは、主にフリューゲルホルンで奏でます。また例のポロロポロロの伴奏は、2本のトロンボーンや3本のトランペットが交互に吹いてリズムをつくっています。その後、アルゼンチン北西部で盛んに踊られる民族舞曲「サンバ」(ブラジルのサンバとは、異なった音楽)のリズムへと展開していき、まさにクレスポ独自の世界へと移り変わっていきます。単に原曲をアレンジした作品というより、新たな作品として感じられます。

変奏を繰り返してドラマチックに盛り上がり、最後は「禁じられた遊び」のテーマをフリューゲルホルンが歌いあげ、静かに幕を閉じます。



Tp1 貝發 Tp2 北村(雅) Tp3 北村(美) Tp4 能勢 Hr 古市
 Tb1 藤岡 Tb2 北岡 Tb3 田中 Tb4 藤本 Tuba 中西

1981年、フィリップ・ジョーンズ・プラス・アンサンプルの結成30周年を祝って、イギリスの作曲家ラングフォードによって作曲され、日本で初演されました。ロンドンの名所を様々な形の音楽で綴ったもので、フィリップ・ジョーンズは「音楽のカメオ」と表現しました。

1 ロンドンの呼び声(スケルツォ)

ロンドンに到着しました。目の前に広がるロンドンの街。さて、どこを散策しましょうか？ ファンファーレと6/8拍子のリズムで街を歩く様子が巧みに描かれています。終わりに夕暮れの鐘の音が聞こえてきました。



ピカデリー・サーカス

3 グリーンパーク(パストラル)

バッキンガム宮殿の横、街中とは思えないほどの平和な静けさに包まれた公園。緑の中、牧歌的な音楽でゆったりとした時間を過ごしましょう。

グリーン・パーク



バッキンガム宮殿

私たちの「ロンドンの小景」のために、この街を良く知る大切な友人からメッセージが届きました。

I wish my friends from Kyoto Fine Arts Brass and their audience a wonderful trip around my beloved London with London Miniatures. It is such a fun piece to play and depicts London very well, I am sure everyone is going to enjoy it! Best wishes from Berlin and have a great concert.
 Sarah-san :-)

京都ファインアーツ・ブラスと聴衆の皆さまが、私の最愛の街ロンドンを、「ロンドンの小景」の演奏と共に素晴らしい旅となりますことをお祈りいたします。この楽しい作品は、ロンドンをとてうまく表現しています。私はみなさんがそれを楽しめることと確信しています。ベルリンから素晴らしいコンサートになることをお祈りしています。
 サラさん :-)



2 ソーホー(ブルレスケ)

有名なナイト・クラブや劇場のある街に出かけてみましょう。夜の街はちょっと怪しい雰囲気。でも、おどけていて戯れている様子です。パブでウィスキーでも飲みながら・・・う～ん、ちょっと飲みすぎたかな？



4 トラファルガー広場(ホーンパイプ)

ウェストミンスターにある広場で、海将ネルソンの記念碑が建っています。水兵たちの踊りである「ホーンパイプ」の形式を採用。海将ネルソンにちなんで憎い演出です。



ロイヤル・フェスティバルホール

5 戦没者慰霊碑(エレジー)

トラファルガー広場からウェストミンスターへ抜ける途中、首相官邸近くの道の真ん中に建つ慰霊碑です。ここには静かな哀歌が流れます。



散歩道「ザ・マル」

首相官邸



ホース・ガーズ

ウェストミンスター

6 近衛騎兵のパレード(マーチ)

何が始まるの？
 ホース・ガーズの裏の広場で、騎兵の交代式が見られます。騎兵の交代は、マーチのテンポに乗せて軽やかに、そして粛々と執り行われます。

最後に、もう一度ロンドンの呼び声が聞こえてきて小さな旅を締めくくります。

音楽によるロンドン巡りはいかがでしたでしょうか？



特別レポート SPECIAL REPORT

東日本大震災から1年目を迎えた前沢へ

2012年3月10日(土)11日(日)、第25回全日本アマチュアプラスアンサンブル(略称NABEO)フェスティバルが岩手県奥州市前沢で開催されました。私たちKFABはこのフェスティバルに参加してきましたので、それをレポートいたします。

去る2011年3月11日東日本大震災がおこりました。

フェスティバルは、毎年1回日本各地で開催されていますが、今年のフェスティバルの日程は、震災が起る前から3月10、11日に岩手県前沢でと決まっていたとのこと。運命のような偶然。岩手前沢実行委員会の皆様のご尽力により準備が進められ、開催に至りました。

私たちは京都ファイナーーツ・プラスとしてフェスティバルに参加するかどうか何度も話し合いを重ねました。あの震災の日から自分達に何が出来るか…。身近なところからできること、大好きな音楽を通じてできること…。メンバーそれぞれが、現場に行って見て肌で感じてみたい、音楽を通じて一緒にになにかできたら…。そんないろんな想いを持つなか、11名が仙台経由前沢に向けて出発しました。参加できないメンバーの想いも受けとめながら。

仙台空港は、あの日から1年というセレモニーの準備が進められており、津波の被害をうけた仙台空港が復旧に至るまでの写真やメッセージがたくさん掲げられていました。津波で海と化した空港が、1年たったその日は、震災を全く感じさせない美しい空港に戻っていましたが、空港を一步外に出て車を走らせると、瓦礫が山のように積み上げられていたり、船が道の脇にまだ残されていたり…。いろんな想いに浸りながら、前沢へ車を走らせました。

車窓からみえる瓦礫の山



前沢は、3月11日の震災で長期停電、ガソリン不足とエネルギーのない生活を余儀なくされ、また4月7日の大余震で200世帯ほどが全壊・半壊の被害を受けました。その前沢の中でも特に被害が大きかった五十人町で、1年前までは民家が建っていたという土地を会場にして、街角コンサートが開催されました。



3月とはいえ、小雨かみぞれかという寒い日となりましたが、会場には、普段なかなか演奏会を聴きにでかけることができない方など50~60人ほどの地元の方が集まってくれました。

雨で、楽器を置く場所などに困っていると、近所の家の方がビニールシートや新聞紙、大きなプラスチックケースなど使えそうなものをいろいろと出してきてくれました。

いよいよ演奏を始めようというとき、メンバー全員で顔を見合わせ「この地で演奏すること」の意味について改めて確認しました。心をひとつにすると、その場にいた地元の方々から拍手が…。演奏前からステージにあたたかく送り出されるように感じました。



会場は小雨のためぬかるんでおり、ステージは客席から離れた舗装された場所でした。私たちは少しでも近くで演奏しようと、お客様の前にでました。そして司会の「しばれるねえ」の一言がお客様の笑いを誘うと、オープニングには、本日のプログラムにもある「2本のフリューゲルホルンのためのバラード」を演奏しました。

次は岩手出身の千昌夫の「北国の春」。やはり土地の歌は喜んでもらえました。ぐっとみんなの気持ちがほぐれて、続けて演奏した美空ひばりの「川の流れのように」も、手拍子と共に一緒に口ずさんでくれました。



五十人町のみなさん

映画「サウンド・オブ・ミュージック」の挿入歌「ドレミの歌」は、お客様と現地スタッフの人も一緒になって歌ってくれました。映画のクライマックスの曲「すべての山にのぼろう」では、お客様の笑顔と同時に雨も上がり、晴れ間も見えてきました。最後に「ふるさと」を全員で演奏すると、涙を流して一緒に歌ってくれる方もいて、私たちの心にも熱い想いがこみ上げました。

演奏が終わると、何人ものお客様が笑顔で近づいてきて「足元が悪かったのに大丈夫だった?」「震災以来こんなのは初めて!楽しかったわ。」と声をかけてくださいました。そして近くの造り酒屋からのおいしくて温かい甘酒の振る舞いもありました。お客様の笑顔と甘酒で、いつの間にか寒いのもすっかり忘れていました。この街角コンサートの様子は、翌日、地元岩手の新聞にも紹介されました。



2012/3/11 朝刊

街角コンサートを終えると、フェスティバルの会場である前沢ふれあいセンターに向かいました。フェスティバルでは全国から集まった17団体それぞれがステージで演奏をします。私たちの出番は11日ですが、少しでも多くのお客様に音楽を届けたくて、フェスティバルが始まる前の時間を使ってロビーコンサートを行いました。演奏を始めると次々に人が集まりました。楽器をはじめた学生さん、小さなお子さんをつれたご家族、フェスティバルの参加者…。そして、つい先ほど街角コンサートを聴いたことがきっかけで駆けつけてきてくださった方もいました!



3/10のロビーコンサート



KFABのステージ「ロンドンの小景」の演奏

そして、いよいよ3月11日、地震から1年のその日に、私たちのステージの時間はきました。復興への祈りをこめて、今できる最高の音楽を届けようとステージに上がりました。前沢に来ることができなかったメンバーや、家族の祈りもこめて…。すると、なんとここにも、街角コンサートを聴いてくださった方が、わざわざ私たちのステージの時間を主催者に問い合わせた上で聴きにきてくださっていました。いつの間にか私たちの方が、前沢の方たちに励まされていました。





復興支援にはお土産を買っていただき
前沢の魅力を感じていただくが一番!
皆さん誘い合って、また来てください。
(岩手前沢実行委員会 委員長 小野寺さん)



私たちのステージのあと、地震の起きた14:46には、「東日本大震災1年追悼式典」が執り行われました。黙祷のあと、会場にいる全員で「ふるさと」を心ひとつにして歌いました。自然と想いが涙となって溢れました。まさに今、ここに居ること、家族や仲間がいること、音楽をさせてもらえる幸せをかみしめました。

胸がいっぱいでしたが、帰宅の時間がせまっています。帰り道にできるだけ前沢のお店に寄り、お土産をたくさん買いました。

中でも、街角コンサートのときに甘酒をふるまってくださった吉田酒店さんは、帰りに私たちの姿が見えなくなるまで、いつまでも手を振ってくださり、その気持ちがとてもうれしく感じました。

後ろ髪をひかれる思いで仙台空港に向かい、それぞれの帰路につきました。東北の寒さより心の温かさが記憶に残る、感慨深いフェスティバル2日間でした。



ずっと手を振ってくださった吉田酒店のおかあさん



仙台空港近くの田んぼには
あちこちに打ち寄せられた
船がありました

最後にもう一つだけ、おまけのおはなし。

一度食べてみてくださいな「前沢牛」。前沢の最高級の黒毛和牛です。初めてご当地でそれを口にした私は、その柔らかさにびっくり! 直営店「おがた」さんに行き、勢いづいて、うん万円ものお肉を買ってしまいました。この柔らかい美味しいお肉を、一緒に岩手に行けなかったけどエールを送っていた家族にも是非味わって欲しいと、おもわずふんばつ・・・。

買って、みんなで食べて、よかった。家族もびっくり!大喜びでした!!

(めでたしめでたし)



ふるいっちゃん

自他ともに認めるB級グルメであり、中でもラーメンは主食のレベルと言えよう。自動車も大好物のひとつだ。メカに精通し故障との付き合いに無上の喜びを感じられる。休日には遠方のオフ会に出掛けて仲間であんちくを楽しむ等、くるまマニアでおられる。楽器に限らずくるまに限らず、あらゆるジャンルに人間系ネットワークを持っておられるので、ネタが豊富でトークが楽しい。ユーモア溢れるトークを生かした「ナンパ」も得意でおられる。の極み。老若男女、幅広く仲間の広がりや団内に提供頂くのである。



たえこ

笑顔のかわいらしさは勿論だが、独特の脱力系会話に少々トリッキーなポケつつこみが入って何とも愛らしい。団内トップクラスのリテラシーの高さは特筆もの。団の事務方仕事にも如何なく発揮され、その代表例がお手元のパンフレットだ。エディターの領域を超えクリエイターとしての大活躍である。ただただ感謝感謝。打楽器専門家たえこの入団はKFABにとって大きな力を得た出来事であったが、この原稿を書いていて気が付いた。パトリの中に紅一点ではないか!パトリ会議が楽しかったこと間違いはないはずである。



ひでくん

最年長級の割にはチョコラの性質を持ち、しょーもない悪戯が大好き。巷で流行るスマホなど新しいデジものが大好きだが、使いこなしているか疑問が残る。「ちっさいおじさん」という愛称も流行中。スープとナスと熱燗が好物である。チョコラを發揮したら決まって仕返しが来る。そこに喜びを感じる典型的なM系シニアである。まあそれだけ皆に親しまれる存在なのだ。多忙の日常でも団運営の事務方実務を沢山こなしていただき、練習においても笑いを連れてくるムードメーカーなのです。



しんやくん

寸劇、シャウト、司会乱入、仮装乱入など、楽器以外にも芸達者で有名。主な芸歴にティコティコダンス、クンパル寸劇などがある。いずれも妥協なき迫真の歴史的名演で、未だ他者の追従を許さない。芸といえば「おなら」を自由に操るといった技も持つ。他人の問いかけに「返事」といった簡単な技から、ピンポンのように相槌を打つ高度な技も。本人曰く「匂い」も制御できるらしい。臭くない屁を狙って出す技、ナイトスクープの小ネタぐらい、いけるんちゃう?



おにいさん

通常はおにいさんなのだが、稀に「コトブキさん」になれる。新郎新婦の後ろに写り込むという単純な芸である。ただその写真が幸せの道具として使われたかどうかは定かでない。食と酒に精通しておられ、食べるのみならずシェフとなり辣腕をふるわれる。合宿の宴会には欠かせない酒の肴の料理長である。忘れてはならないもう一つの芸が「司会」だ。KFABの演奏会では、そのわかりやすさ的確さで、いつもお客様の好評を博している。手前味噌ながら自慢のアイテムの1つだ。本日の幕間においても是非ご堪能いただきたい逸品なのである。



きゃーはつくん

「からすのおっちゃん」という異名を取られたこともある。伝説をつくることに長けておられ、「まんたん」に新たな意味を付けてしまった事は以前にご紹介したとおりである。原稿提出の締切を守れない姿をよく拝見する。おっと他人事でなかった(編集局、ゴメンナサイ・・・)。最近ではアジア圏への長期出張などで、ますますお腹を下される機会が増えられたご様子。KFAB発足の仕掛け人でおられ、まさにメンバーの真ん中におられる存在です。お体大切に、そしてますますのご活躍を!



英国ブラススピリッツ

ルネサンス期からバロック期にかけて、バード、ホルボーン、ロック、パーセル、ヘンデルらの多くの作曲家が英国で金管楽器のための作品を書いた。

金管アンサンブルで演奏される曲の宝庫と言える様々な作品が溢れており、KFABでもこれまで何度も取り上げてきた。

時は流れ、近現代のホルスト、ブリテン、ヴォーン・ウィリアムズと金管のための作品には枚挙にいとまがない。

また、英国には炭鉱や工場などの職場ごとに、また各地の村々にも金管バンドがあり、そこでは、金管楽器の演奏技術や作品が何世代にもわたって脈々と受け継がれている。

そのような土壌があったのか、フィリップ・ジョーンズが「ブラスアンサンブル」という演奏スタイルを創出したのは歴史の必然と言っても過言ではなからう。

彼らのブラスアンサンブルに衝撃を受け心動かされた数多くの人の一人として、今もこうしてブラスアンサンブルの世界に浸れることに感謝したい。

衝撃的な出会いにより始まったとも言えるブラスアンサンブルの世界であるが、KFABにおいてもアンサンブルを通じて様々な出会いがあった。

「ロンドンの小景」の楽譜。

この楽譜との出会いはKFAB結成のきっかけのひとつになった。

今回取り上げる作品も楽譜や演奏との出会いがきっかけになったものがたくさんある。

作品からインスパイアされ、その作者からその背景へと想いは果てしなくつづく。

音が鳴るのはその一瞬のみ。

その一瞬が人の心をとらえ動かし、いつまでも心の中に響き続ける。

その心の共鳴が出会いという形になって現れるのだ。

瞬間瞬間の心の共鳴があり、それこそがアンサンブルをする由縁となる。

フィリップ・ジョーンズが導き出したともいえるブラスアンサンブルの世界。

英国ブラススピリッツの血が流れる彼らの音楽が世界中の人々を魅了し、

我々の心をも踊らせるのである。



オリンピック・パーク



TRUMPET

浅野 弥生
伊豆田 和也
伊豆田 恭子
貝發 達也
加悦 愛子
北村 雅紀
北村 美繁
鶴田 鋼司
能勢 秀之

HORN

井田 右妥子
北脇 知己
野々口 義典
古市 道和

TROMBONE

小野 道生
北岡 あや
坂根 通
田中 寿
藤岡 信嘉
藤本 雅巳

TUBA

竹内 信也
中西 ようこ
峯松 勲

PERCUSSION

堀内 妙子

<演奏会の軌跡>

- 第 1 回演奏会 1994.07.03 バロックザール 京都・青山音楽記念館
- 第 2 回演奏会 1995.07.02 電気文化会館 ザ・コンサートホール(名古屋市)
1995.07.09 バロックザール 京都・青山音楽記念館
- 第 3 回演奏会 1996.01.15 京都コンサートホール(小ホール)
- 第 4 回演奏会 1996.09.23 京都コンサートホール(小ホール)
- 第 5 回演奏会 1997.03.23 バロックザール 京都・青山音楽記念館
- 第 6 回演奏会 1997.09.21 京都府立府民ホール アルティ
- 第 7 回演奏会 1998.08.23 京都府立府民ホール アルティ
- 第 8 回演奏会 1999.09.05 京都府立府民ホール アルティ
- 第 9 回演奏会 2000.03.12 バロックザール 京都・青山音楽記念館
- 第10回演奏会 2001.03.04 京都府立府民ホール アルティ
- 第11回演奏会 2002.09.08 滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール(小ホール)
- 第12回演奏会 2004.07.18 京都府立府民ホール アルティ
- 第13回演奏会 2005.12.04 ムラマツリサイタルホール新大阪
- 第14回演奏会 2007.03.04 安土町文芸の郷 文芸セミナーヨ(滋賀県近江八幡市)
- 第15回演奏会 2010.03.22 宗次ホール(名古屋市)
- 第16回演奏会 2012.07.22 京都府立府民ホール アルティ

